

全学共通教育についての自己点検・評価報告書（教育部会用）

教育部会名：歴史と文化

部会長名：萩原守

作成者名：萩原守

概要（2000字）

平成 19（2007）年度における神戸大学全学共通教育の「歴史と文化」教育部会が担当した授業科目は、予定通り多数の教員の協力によって、内容の充実した授業を実施することができた。その自己点検・自己評価の総括として、各授業担当教員からの報告に基づき、ここで以下にいくつかの視点から、平成 19 年度の授業の諸問題を詳しく検討しておきたい。

まず、「歴史と文化」教育部会では、「アジア史」、「日本史」、「西洋史」、「歴史と現代」、「科学史」、「芸術史」といった実に広範囲かつ組織だった区分に基づく多彩な授業が設定されており、その授業内容も教育課程の趣旨に沿って計画通りに展開された。また、同じ授業科目名であっても、担当する教員の専門に応じて地域や分野がうまく分散し、比較的バランスのとれた授業編成を展開することができた。これら各授業の概要に関しては、各教員ともに意識してあらかじめ詳細なシラバスを作成し、受講者たちにその詳しい情報を事前に提供しておくことを心がけていた様子が、担当者たちの報告からよくわかる。

次にその授業内容のレベルを高く維持できているかどうかという問題に関してであるが、教員自身が最先端の研究成果を授業で直接学生に伝えるという意味では充分にうまくいっているようである。ただ、教員が学生自身の自発的な問題関心を呼び起こして、自ら最先端の研究成果を発見させるという、より高度な意味での教育の面では、図書館とその書庫の利用がやや困難な時期があったため、必ずしも満足できるような授業形態にはならなかった。これに関しては平成 20 年度前学期には、より大きな問題となっている可能性もあろう。

また、もう一つの問題として、各授業当たりの受講学生数の多さが常についてまわる。例えば、150 人から 200 人を越えるような授業で予習・復習や宿題を指示しても、なかなかその結果を全員分確認する時間は取れず、また一方的に指示するのみでは学生側の達成感が刺激されないという矛盾も生じるわけである。1 冊しかない図書館の参考文献に多数の学生が殺到するといった問題も起こる。

しかしこの受講者数の克服問題に関しては、担当教員の報告から見ると、かなりの教員が色々と工夫を凝らして小テストや独自の授業評価等を実施していることもわかる。例えば、あらかじめシラバス等で学生側からの発表を指示・予告しておいたり、授業中に全員に作業資料を配付するなどの工夫である。また、一般的に多人数の授業では、演習や実習の実施が相当に困難であるが、OHP、パソコン、ビデオ、討論型授業等々の指導法の工夫に関しては、比較的容易に導入できるためか、多数の教員が実施している。また受講者数の問題は、自主学習や学力不足の学生への配慮に関してもしばしば問題となるが、参考文献の提示や質問の受付等々、できる範囲内の工夫は充分になされていることがわかる。

一方、学生側から見た場合の最も重要な問題は成績評価基準と単位認定の問題であると思われるが、これに関しては、全教員が完全に適切な措置を取っている。全ての問題の中でこれが最も重要であることを、全教員が明瞭に理解していることがわかる。

次いでその学生たち自身による授業評価に関しては、その重要性を全教員が十分に理解しているが、一方で学生による回答率が、紙媒体で実施していた以前の時期に比して現在はあまりにも低すぎるため、授業評価結果の正当性を疑問視している教員もいる。

そのために、大学側からの授業評価とはまた別に、教員独自の手法で学生からの評価を調査しているケースもある。この独自調査の回答率は相当高いようである。実際にこの問題は、以前に比してははっきりと悪化した条件であるといえるため、ここが最も改善の余地を残しているといえるかもしれない。また、学生からのオフィスアワーや電子メール等を利用した個別の質問や相談は、ほぼ全員の教員が利用しているようである。受講者数が多く、一人一人全員に教員から助言するということは実施不可能なため、相談を求めてきた学生にのみ助言するというのが精一杯のようである。

以上のように、総じて言えば、平成 19 年度の「歴史と文化」教育部会での授業は、図書館問題や受講者数、授業評価の信憑性等、条件的に決して恵まれていたわけではないが、大多数の教員が相当に工夫を凝らして授業を実施していたことがわかる。特に永年共通教育に携わり豊富な経験を持つ教員たちが独自の工夫を開発していて、上記の諸問題を十分に克服できるような授業を実施していたといえる。

様式 2 (続き)

### 項目・観点ごとの記述

#### 基準 5 教育内容及び方法

5-1-②： 授業の内容が、全体として教育課程の編成の趣旨に沿ったものになっているか。

(観点に係る状況)

「歴史と文化」教育部会の各授業は、多彩な内容ながらも、一貫して教育課程の趣旨に沿ったものであることがわかる。

根拠資料 シラバス、各授業担当者から提出された自己評価の「授業概要」部分

5-1-③： 授業の内容が、全体として教育の目的を達成するための基礎となる研究の成果を反映したものとなっているか。

(観点に係る状況)

ほとんどの授業担当者が「はい」と回答している。ただ一人「いいえ」と回答した担当者も、図書館閉鎖のため予定したような授業が実施できなかったための回答である。

根拠資料 シラバス、授業中に配布したプリント

5-1-⑤： 単位の実質化への配慮がなされているか。

(観点に係る状況)

ほとんどの授業担当者が「はい」と回答しているが、何しろ 200 名を越えるような多数の授業が存在するため、宿題の提示や小テスト等の実施が困難であった授業もある。

根拠資料 シラバスでの参考文献指示や課題指示、試験問題

5-2-①： 教育の目的に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組合せ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法の工夫がなされているか。（例えば、少人数授業、対話・討論型授業、フィールド型授業、多様なメディアを高度に利用した授業、情報機器の活用、TAの活用が考えられる。）

（観点に係る状況）

多人数の授業が多いため、演習、実習形式の教育はかなり困難であるが、約半数の担当者は、学生に発表させたり、作業をさせたりするなど、工夫をこらしていることがわかる。

根拠資料 授業中に配布したプリントや作業資料、シラバス（学生による発表の指示）

5-2-③： 自主学習への配慮、基礎学力不足の学生への配慮等が組織的に行われているか。

（観点に係る状況）

多人数の授業が多いためこれも実施は容易でないが、種々のレベルの参考文献を提示したり、理解できなかった箇所の質問を受け付けたりする配慮と工夫がなされている。

根拠資料 シラバス（質問歓迎の文言・参考文献の指示）

5-3-②： 成績評価基準に従って、成績評価、単位認定が適切に実施されているか。

（観点に係る状況）

全ての担当者が「はい」と回答している。これが最も重要な問題であることを全員がよく理解している。

根拠資料 試験問題と答案、出席簿

## 基準6 教育の成果

6-1-③： 授業評価等、学生からの意見聴取の結果から判断して、教育の成果や効果が上がっているか。

（観点に係る状況）

ほとんどの担当者が「はい」と回答しているが、学生による授業評価の回答率が一般に低すぎるため、正しく判断できないとする担当者も少なくない。

根拠資料 学生授業評価集計結果

## 基準7 学生支援等

7-1-②： 学習相談、助言（例えば、オフィスアワーの設定、電子メールの活用、担任制等が考えられる。）が適切に行われているか。

（観点に係る状況）

シラバスに、質問を歓迎する文言やオフィスアワー、電子メールアドレス等を掲示している担当者が少なくない。

根拠資料 シラバス